住宅型併設 特養オープン

ケア記録の電子化も進める

社会福祉法人松美会（山口県下関市）は7月1日に地域密着型特養、住宅型有料老人ホーム（以下：住宅型）、小規模多機能が一体となった「アイユウの宛しおはま」を下関市内で開設した。同法人はISOを取得するなど品質管理を特に重視。ケア記録の電子化も開始し、これまで以上のケアを目指している。

社会福祉法人松美会

高下康司
品質マネジメントシステム実行担当者

▶7月1日開業の「アイユウの宛しおはま」

――事業内容について。

高下　7月1日に20室の住宅型、小規模多機能、地域密着型の特養（29室）が一体となった「アイユウの宛しおはま」を開設。住宅型と小規模多機能の運営は当法人初の取り組み。これにより介護事業としては地域密着型特養・デイサービス・ショートステイが各2事業所、特養・住宅型・グループホーム（18室）・小規模多機能・サテライトのデイサービスを1事業所ずつ運営。ほかにも訪問介護・看護・入浴、居宅介護支援に加え、下関市から委託で在宅介護支援センターも運営。これまで介護事業のみを手掛けてきたが、今年の4月に保育園1カ所を運営していた法人を吸収合併し、現在は保育事業も行っている。

――「アイユウの宛しおはま」について。

高下　29室の特養は全入居者が決定、住宅型も半分以上の契約が決まっている。初めて住宅型を運営してみて感じたことは手厚いケアを必要とほしないが、ADLの低下が見られるなど案外元気ではない人もいるということ。介護を必要とする人のケアには慣れているが、元気高齢者の支援は初めてなのでこれからノウハウを蓄積させていきたい。

――法人の特長や注力していることは。

高下　約15年前にISOを取得。品質管理、課題に対する改善能力の高さには自信を持っている。ISOを取得していることもあり、経営計画は細かく設定し、進捗状況を細かく把握しながら慎重に事業を進めていくのが法人の特長。新たな取り組みとしては4月から介護保険請求やケアプランの作成を行う「ファーストケア」とケア記録のICT化を実現する「ファーストケアポータブル」（販売・ビーシステム／川崎市）を各施設に導入した。

事業者の取り組み

――ICT化の背景は。

高下　法人の事業が拡大するにつれ、記録に関する資料が膨大な量となり、保管場所に困っていた。ICT化によってケア記録を効率的に行えるようになり、職員の残業時間は大幅に減った。当然、残業代の削減にも繋がっている。毎月の残業代を考慮すれば、導入費用は非常に安い。新規開設したアイユウの宛しおはまにもファーストケアシリーズを導入済みだ。

▶スマホ（フリック）入力も可能

――現場での反応は。

高下　iPadなどのタブレット端末を使うシステムは多々あるが、ファーストケアポータブルはシンプルで直観的な操作が可能。簡易説明書を作り、研修・トレーニングを何度も行ったため、職員が慣れるのも早かった。電子化する部分を段階的に分けたこともスムーズに導入できた要因の1つ。特養で言えば4月に食事量、5月にバイタル・入浴と段階を経て、6月から全記録をICT化した。バイタルや喫食・排泄量など、現場での記録がそのままシステムに記録されるため、紙による転記作業も無くなり、業務の簡略化に繋がっている。イベントなどの様子をタブレット端末で撮影し、写真で記録を残せるのも利点。文字の入力はキーボード入力、50音入力、スマホ（フリック）入力、手書き入力、音声入力から選ぶことができ、スマホ（フリック）入力を使っている職員も多いようだ。ITツールに対して苦手意識を持っていた職員も現在はケア記録を楽しんでいる。

――ケアにも変化が見られる。

高下　ケア記録の電子化に伴い導入したiPadを活用し、郷土料理の写真や地元の祭りの動画などを見ている。職員との会話が弾みやすくなっただけではなく高齢者間のコミュニティも生まれやすくなった。タブレット端末を活用することでこれまでの会話にプラスアルファの要素を加えることができる。更に質の高いケアを今後も探究し続けていきたい。